

オープン カレッジ

企業の業績を語るべき、私たちがまず会計の数字を見る。利益は増えたのか、売り上げは伸びたのか。数字が良ければ企業は「順調」に推移している、「悪ければ」苦戦している」と考え、冷静に考えてみると、その数字が示している企業の業績とは何なのだろうか。その関係は、私たちが思うほど安定しているのだろうか。

会計の数字は企業をどこまで語れるか

学教員であっても、即座に言葉にするのは難しい。私たちがしばしば、会計の数字を、企業の状態をそのまま表すものとして受け取る。だが、その理解は必ずしも適切とは言えない。むしろ会計の数字は、レンズや光の当たり方によって写り方が変わる写真に近い。写っているのは確かに現実だが、その姿は撮り方に依存する。会計の数字も、企業の状態をそのまま測ったものというより、企業活動の一部を、ある条件のもとで捉えた観測結果に近い。では、その「ある条件」とは何か。端的に言えば、

あつても、会計の数字は変わりうる。認識や測定の基本などが異なれば、示される企業の財政状態や経営成績も変わる。その結果、会計の数字を手がかりに企業を理解する利用者の印象は、条件次第で大きく変わる。

では、私たちは会計の数字をどのように読めばよいのだろうか。重要なのは、数字を企業の状態そのものとして理解するのではなく、その数字がどのような条件の下で示されたものかを意識することである。会計の数字は、企業の状態を直接語るものではなく、会計制度を通じて表現された一つの見え方にすぎない。つまり、数字を見る際には、その背後にある成り立ちにも目を向ける必要がある。

どんな条件下で

示されたかを意識

き問いが見えてくる。会計の数字は、企業の何を映しているのか。そう問われると、日々学生と向き合う大



愛知淑徳大学准教授
眞鍋 和弘

それは会計制度である。会計の数字は、企業の状態をそのまま表したものではなく、一定の認識および測定基準、表示のルールを通じて作られる。企業活動を通じた収支が一定の基準により配分されることで会計数値は作成される。こうした制度的条件の下で、会計の数字は企業の状態を示す。

会計制度という条件が異なれば、同じ企業の状態で

まなべ・かずひろ 専門は財務会計。横浜国立大学大学院国際社会科学部研究科企業システム専攻博士課程修了。博士(経営学)。1980年生まれ。